

酪農教育ファーム全国実践 研究会議の概要

本会議は8月3日、東京八重洲ホールで平成24年度酪農教育ファーム全国実践研究会議を開催し、教育関係者、ファシリテーター（酪農家）、地域事務局担当者（指定団体）などから48名の参加者を得て、教育ファーム活動の研究報告と出前授業の位置づけに関する討議を実施した。

防疫対策の重要性を強調

開会あいさつで本会議の門谷廣茂専務は、「本日の酪農教育ファーム活動の研究報告や課題討議の成果を実践の場で活かして欲しい」と述べるとともに、「酪農教育ファーム活動は10数年の歴史があるが、一昨年宮崎で発生した口蹄疫など家畜伝染病の防疫対策が重要な課題となっている。口蹄疫の感染ルートが解明されない状況の中で、家畜伝染病予防法の改正や飼養衛生管理基準・防疫指針の見直しが行われ、牧場内の衛生管理区域を設けて部外者の行動を制限すること、酪農家が記録を作成・保管すること等をお願いしている。最近多発している自然災害と同様に、酪農教育ファーム活動を展開する上で、最大限の対策を講じることが重要である」と強調した。

研究報告

第1部では、大妻女子大学家政学部の石井雅幸准教授が、「酪農体験におけるファシリテーターの効果的な声かけとは」と題して、酪農教育ファーム活動の経験が豊富な酪農家を事例に、酪農体験中の子どもたちに対する特徴的な“声

かけ”に着目した研究成果を報告した。

研究成果の報告要旨は以下の通りである。

(1) 酪農体験で見られた活動について

調査対象となった全ての酪農体験（6牧場）で見られた活動は、「仔牛とのふれあい」と「牛舎管理の話」であった。そうほかでは、「搾乳」、「餌やり」、「バター・チーズ作り」、「ブラッシング」、「アイス作り」などの活動が、半数以上の牧場で実践されていた。

(2) 効果的な“声かけ”について

①酪農体験毎に、複数の酪農家に共通する“声かけ”がある。

搾乳体験での牛の紹介（餌、胃、反芻、体温、出産、除角、模様、雌雄別の運命）、搾乳技術・安全管理に関する指導、上手にできた時の褒め言葉、ミルクが温かいことを共感させる言葉など。

②複数の酪農体験で、共通して多く見られる“声かけ”がある。

「いただきます」の意味を伝える言葉、牛が経済動物であることを伝える言葉、安全面に配慮



した言葉、牛の気持ちを伝える言葉、子どもの行為を褒める言葉など。

③ | 教諭経験者が読み取る、子どもに影響力のあるファシリテーターの“声かけ”がある。

子どもが自分たちと牛とを比較して考えることができるようにする言葉、自分の行動に対して牛はどう感じ、どう反応しているのかを子どもが考えられるようにする言葉。

(3) 個々のファシリテーターの特徴的な“声かけ”について

ファシリテーターは、個々に思いをもって酪農体験活動を行っている。この思いに即した特有の“声かけ”が、個別指導場面で見られる。

- ①子ども一人ひとりに、体験の一つひとつを、はじめをつけて行って欲しいという願いが、活動の中で“声かけ”に反映されている。
- ②五感を使わせる、牛と同化させる、牛の気持ちを通して思いやりの意識を身につけさせる、牛と人間のライフスタイルの共通点と違いを理解させる等の願いが、活動の中で“声かけ”に反映されている。

(4) 今後の課題

- ①酪農家の特徴が個別指導でも見られるのかを、子どもの反応との関係から見ていく。
- ②経験豊富なファシリテーターと、認証を受けただけのファシリテーターとを比較する。

グループディスカッション

第2部では、参加者が5つのグループに分かれて、「酪農教育ファーム活動における出前授業の位置づけ」について意見交換した。意見交換のテーマは、①牧場体験にはない出前授業のメリット（魅力、効果）とは、②出前授業ならではのデ・メリット（苦勞する点、問題点）とは、③メリットを活かしつつデ・メリットを克服するような効果的な出前授業のあり方とは、等であった。各グループで出された主な意見は以下の通り。

(1) 出前授業のメリット

- ・学校側にとって準備が楽な手軽な方法である。
- ・人数が多い大規模な学校でも対応できる。
- ・酪農家側は、牛を連れて行かない場合、防疫上の不安や牛へのストレスを軽減できる。
- ・学校側は、バスの手配などに係る経済的負担が軽減される。
- ・牧場と違い、子どもたちの興味を惹くものが少ないので、酪農家の話に集中しやすい。
- ・学校施設での授業ならば、天候に影響されない。

(2) 出前授業のデ・メリット

- ・酪農家側には、牛に合わせたいという共通した思いもあるが、移動による牛へのストレスが大きくなる。
- ・牧場を空けるので、日常業務（仕事）の調整が困難になる。
- ・一度に大勢の子どもたちを相手にするので、話術の優劣が問われることが不安である。
- ・実施の時間と場所の設定が難しい。
- ・酪農家側が積極的に準備をし、教師が受け身になりやすい。
- ・体験に勝る学習はない。
- ・容易に行けない場所に行き、実際に体験することに効果や可能性がある。

(3) 効果的な出前授業のあり方

- ・酪農家の置かれている状況や思いを、ファシリテーターと教師が共有できる交流が大切である。
- ・バケツミルクや抜けた牛の糞など、子どもたちの興味をひきそうな物を利用する。
- ・教師と酪農家が、目的の確認など事前の打ち合わせをしっかりとやる。
- ・次の機会につなげるため、子どもたちや教師に感想文を書いてもらう。
- ・最終的には牧場に来てもらうことが重要で、出前授業の後で牧場に来てもらい、足りない部分を補完するという繰り返しのステップを用意することが、出前授業をより効果的にする。